



TITLE:

マルクスに於ける精神科學的方法

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. マルクスに於ける精神科學的方法. 經濟論叢 1932, 34(4): 668-688

ISSUE DATE:

1932-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130169>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第

卷四十三第

行發日一月四年七和昭

## 論叢

動的資本と課税

法學博士 神戸 正雄

社會理念とイデオロギー及びミースト

文學博士 米田 庄太郎

マルクスに於ける精神科學的方法

經濟學博士 石川 興二

## 時論

上海事變を通じて見たる日支關係

經濟學博士 作田 莊一

## 研究

大量觀察に於ける理論と技術

經濟學士 蛭川 虎三

國勢調査の性質に就て

經濟學士 岡崎 文規

燒津鰹漁業に於ける船仲組織

經濟學士 岡本 清造

アルフレッド・ウニバーの工業集積理論について

經濟學士 菊田 太郎

## 說苑

經濟學と經營學との境界線に就て

經濟學士 谷口 吉彦

東海道濱松宿に於ける人馬遣ひ方について

經濟學士 大山 敷太郎

デイーチエルの公債論

經濟學士 鹽見 眞澄

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

## マルクスに於ける精神科學的方法

石川興二

### 目次

- 一、緒論、マルクス新研究の必要    二、デイルタイによる精神科學的方法の鮮明  
三、スミスよりマルクスへの精神科學的方法の發展    四、『商品論』に於ける精神  
科學的方法    五、結論、資本主義社會の本質の鮮明に對する其意義

### 一、緒論、マルクス新研究の必要

マルクスは今日まで多く觀念論のアンティテーゼとしての唯物論として解せられ來つた。然しかくの如き唯物論は、觀念論と同様に觀想的な立場 *der anschauende Standpunkt* である。眞に實踐的な立場 *der praktische Standpunkt* に立つ時、觀念論と唯物論とは止揚されるのである。それ故にマルクスはヘーゲルの觀念論に反對すると共に、またフォイエルバッハの觀想的な唯物論に反對し以て世界を變革せんとする眞に實踐的な立場に立つて彼の哲學を打立て、また彼の經濟學を確立したのである。従つてマルクスの哲學も經濟學も、かくの如き眞の實踐的立場に立つて初めてこれを理解することが出来るのである。<sup>1)</sup> 而も我國並に世界に於て差し迫りつつある社會の實踐的状態は、學界をしてかくの如き眞の實踐的立場に覺醒せしめつつあるのであつて、かく

1) 拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』本誌 第三十四卷 第一號はマルクスの實踐的立場を明にすることを主觀としこれ等のことを述べた。

て我國の學界も今日初めてマルクスを十分に理解し得る立場に到達せんとして居るのである。我哲學界を代表される、西田幾多郎博士が行爲の自己の自覺の立場を以て眞に哲學の立場なりとなし、また田邊博士が實踐的自覺の立場を以て眞の哲學的立場なりとし、共にマルクスを以て眞の辨證法に最も近きたるものなりとせらるゝ以所も偶然でないと思へられるのである。

私がマルクスを以てアリストテレスより現代のデイルタイ等に至る「生の哲學」の一發展系列上に於ける重要な發展段階としてまた「生の哲學」の上に打立てられた經濟學の重要な發展段階として尊重し理解せんとする所以もまたこゝにあるのである。

眞に實踐的立場に立てる者にして、初めて歴史的社會的實在を其最も具體的な本質であるところの實踐性に即して把握し得るのである。而して既に早くアリストテレスは、人間並に社會的實在を實踐性に於て把握し、此を研究する「實踐學」を『エティカ』並に『ポリティカ』に於て打立てた。これ精神科學の誕生である。デイルタイは、同じく人間並に歴史的社會的實在を、對象把握に基き價值評價をなし、目的を定立し、これを實現するところの實踐性に於て把握し、而も此實踐的實在論の上に初めて精神科學の實踐的認識論を確立し、以て「精神科學の認識論の創造者」と云はれたのである。而して私がこゝに於て問題とせんとすることは、同じく人間をまた歴史的社會的實在をその實踐的本質に於て把握せしところのマルクスに依て、後にデイルタイに至り初めて明な自覺に高められたる此精神科學的方法が、既に經濟理論の研究に初めて適切に用ゐられ

1) 前掲拙稿參照  
2) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』(弘文堂發刊)第一一六頁以下參照  
3) 拙稿『デイルタイ哲學と經濟哲學』(本誌第三十二卷第四號及び第三十三卷第二號)參照  
4)

て居ることである。即ち『資本論』に於ては此研究方法が全體に渡つて用ゐられて居るのであるが、殊に彼が其第一版の序に於て「すべて發端は困難である、これはあらゆる科學に妥當する。だから本書の第一章（第二版以後は第一篇）を殊に商品の分析を含む節（第二版以後は第一章）を理解するとは最大の困難であろう」と述べし『商品論』に於ては最も顯著に此方法が用ゐられて居るのである。故に私は『資本論』中最も難解であり且つ全體の理解の基礎となる此部分に就て、マルクスに於ける精神科學的方法を明にせんとするのである。

而してこれが爲めには先づ、此實踐的精神科學的方法を初めて明確に哲學的自覺に高めたデイルタイに於て此精神科學的方法そのものを一應明にして置く必要があるのである。

## 二、デイルタイによる精神科學的方法の鮮明

先づデイルタイは科學的勞作の二大傾向を分つことによつて、自然科學より精神科學を區別した。今この傾向を一言にして云へば、我々の經驗に於て感覺に觸れ得るものと「感覺には觸れ得ず只た體驗し得るのみのもの」*das den Sinnen unzugängliche nur Erlebbare* とを、換言すれば外的なるものと内的なるものとを分ち、而して内的なるものを除き去り感覺的なるものを法則に従ふ秩序として構成する方向が、自然科學的傾向であり、これに對して感覺的なるものより體驗的なるものへ歸り行く方向が精神科學的方向である<sup>1)</sup>。而してこゝに「理解」*Verstehen* が働くので

1) Dilthey, Ges. Schrif. Band VII, S. S. 82-3.

ある。デイルタイは「こゝに於ては人類史に於て感覺的に與へられて居るところのものより、決して感覺に入らないが而も感覺的外的なものに於て自己を完成し表現するものへと理解が歸つて行くのである」と述べて居る。<sup>1)</sup>即ち「生」Lebenなるものは、感覺に觸れ得ず只た體驗し得らるゝところのものであるが而もそれは或は云爲言行として或は生産物として感覺的な外界へと自己を表現することによつて自己を完成するのである。故に我々は直接に把握し得らるゝものであるところの感覺界に於ける表現を通して直接に把握し難き「生」を把握するのであつて、これが即ち「理解」である。かくてデイルタイは「その對象が生 Leben と表現 Ausdruck と理解 Verstehen との聯關に基ける態度によつて、我々に近づく時にのみ一の科學は精神科學に屬する」と云ふて居る。<sup>1)</sup>而してこのことはこの「生」が個人的生即ち所謂主觀的精神であつても、また社會的生即ち客觀的精神であつても同様である。故にデイルタイは次の如くに云ふて居る。「人間から又は人間によつて實現される客觀的精神から、創造するところのもの、有價值的なるもの、自己を表現するところのもの、自己を客觀化するところのものへ歸つて行く傾向、此傾向がそれに於て表はれる諸科學を精神諸科學と名付けることを正當ならしむるところのものは、第一義に於て最高に於て此傾向並に此傾向から生ずる諸結果である。」<sup>2)</sup>かくの如く此精神科學的方法なるものは創造されたるものより其を創造したものへ歸り行くところの動的なる認識方法である。これ其認識對象を創造するところのものとしての實踐的本質に於て把握せし動的實在論の上に立脚するところの當

1) Ibid. S. 87.

2) Ibid. S. S. 87-8.







してなされて居た心的事實の分析的研究の結果がこれ等の人々によつて歴史的社會的實在の研究に適用せられたのであつて、スミスはこの方法を彼の經濟學研究に應用したのである。而して彼の『分業論』に於ける商品生産關係の解明もまたこの方法によつて爲されて居るのである。即ち第一章に於て社會的事實としての分業が労働の生産力に對して有する意義を考慮せしスミスは、第二章『分業を惹起する原理に就て』に於て此分業社會を成立せしむべき原理を人間性の分析に於て求めたのである。而して此原理によつて各人が行動することによつて分業社會が成立すると考へたのである。進んで第三章に於ては分業の條件としての市場の範圍が廣まるに従つて分業的社會關係が廣まり行くことを明にし、かくて第四章の初に於て曰く、「分業が一度行き渡つて確立される時には、人々が自分の労働の生産物によつて充し得る欲望は極めて僅である。人は自己の労働の生産物にして自己の消費を超過する餘剩の部分を自己の必要とする他人の労働の生産物の部分と交換することによりて自己の欲望の大部分を充すのである。斯くして總ての人は交換によりて生活する。換言すれば或程度に於て商人となる。而して社會自身は商業的社會(Commercial Society)と呼ばれることが適當であるところのものとなる」と述べて居る<sup>1)</sup>。かくこの社會はマルクスの商品生産社會に當るのであつて、またこゝに於ける生産物は當然にマルクスの所謂商品となるのである。

かくの如くスミスはその『分業論』に於て、マルクスの『商品論』に於けると同じく商品生産社會

1) 以上は拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二六四頁以下に詳にす。

の生産關係を明にして居るのであるが、その方法は、マルクスに於けるが如く社會的生の「表現」又は生産物である商品の分析より進んで此社會的生に迫まるにあらずして、この表現より獨立に心的事實を心的事實として分析し、而して此心的事實の結びとして、即ちこの心的事實の作用聯關 Wirkungs zusammenhang として社會的生の事實を考へる立場であり、かくてそれは「生」の面に止まつて居るところの平面的な立場である。

スミスに於ても、マルクスに於けるが如く、この論に引き續いて「貨幣」及び「資本」が考察されて居りまた『序』に於ては既に「富」商品社會に於ける富が商品である——が考察されて居るのである。然し貨幣及び資本の考察に於ても富の考察に於ても只た社會的生より生産されたる物として考察されて居るのみであつて、マルクスに於けるが如くこれを社會的生の表現と看做しこの表現より社會的生を把握せんとする精神科學的方法是は用ゐられて居ないのである。即ちこの意味に於てスミスに於ては「生」と「表現」とが未だ十分なる認識論的統一に齊らされて居らぬと云ふことが出来るのである。

スミスより著しき經濟學上の影響を受けたるマルクスが同じくその經濟學の初めに於て商品生産社會の生産關係を明にせんとするに當りその方法に於て遙に進歩したことに對しては、スミスとマルクスとの間に於ける資本主義社會の著しき發展の外に更に兩者の間にありて方法論的にマルクスに重要な影響を與へたる二人の學者が特に考慮に入れられねばならぬのである。即ちそ

1) 第四章『貨幣の起源及效用に就て』並に第五章『財貨の實價と命價即ち勞働價  
格と貨幣價格に就て』に於てである。引き續き第六章第七章に於て價值價格  
の論を爲す。

れはヘーゲルとフオイエルバッハとである。

先づヘーゲルは世界史をもつて「絶対理念」の表現であると考へ、而して與へられたる世界史的事實を「絶対理念」の表現として理解することを以て、世界史の哲學の課題であると考へた。こゝに「生」と「表現」とは明に認識論的聯關に置れて居るのである。

然しフオイエルバッハはこのヘーゲルの立場を批判し、ヘーゲルの「絶対理念」は我々人間の理性を人間外に措定して超越的な理性としたものであり、それはクリスト教に於て「人間が自己の本質を對象化し、然る後再び自己を此對象化されたる……本質の對象たらしめる」と同様である。即ち「ヘーゲル哲學は、失はれた衰へた基督教を哲學に依つて回復せんとする努力である」とした。而して彼は「人間の自然的立場は……眞の立場であり、絶対的な立場であり、従つて又哲學的立場である。」と主張し、人間の本質に立つことを以て新哲學の立場であるとしたのである。かくてヘーゲルの「絶対理念」なる觀念的「生」はフオイエルバッハによつて現實的「生」の方向へ引き下されたのである。

一度ヘーゲル哲學に没頭したマルクスはこのフオイエルバッハの思想に強く影響せられた。而して彼は次の如くに述べて居る。即ち「汝等、思辯的な神學者並に哲學者ともに私は忠告する。汝等もし在るが儘の事物に即ち眞理に改めて近付かんと欲せば須く、在來の思辯哲學の概念と偏見とより汝等を解放せよ。而して汝等にとつて、眞理と自由とへの道は、淨罪の火たるフオイ

- 1) Feuerbachs Sämmtliche Werke, her von Bolin und Jodl. Band. VII. S. 37. 邦譯フオイエルバッハ『基督教の本質』第五三頁。
- 2) Band II. S. 317. 邦譯フオイエルバッハ『ヘーゲル哲學の批判』第二二七頁

エルドバツハを通じてに非ずしては存せぬのである。かのフオイエルバツハこそは現代の煉獄である。<sup>1)</sup>」

然しマルクスは此フオイエルバツハの立場に止まつてゐることは出来なかつた。即ち彼はこのフオイエルバツハの「生」を更に現實的に具體的に把握しなければならなかつたのである。彼はフオイエルバツハが人間の本質を個人的にまた非實踐的に解し、未だ眞に具體的に理解して居ないことを不可とし、フオイエルバツハの立場を「觀想的唯物論」と呼び、また十八世紀的な「古き唯物論」と呼んだ。かくてマルクスは曰く「フオイエルバツハは宗教的本質を人間の本質に解消する。然しながら人間の本質はなんら個々の個人に内在するところの抽象體ではない。その現實に於ては人間の本質は社會的諸關係の總體である。」且つ「一切の社會的生活は本質上實踐的である。」即ちマルクスはかくの如くに「生」を社會的實踐的な本質に於て具體的に把握したのである。<sup>2)</sup>而してこの社會的實踐的な實在論の上に立つた彼の認識論は自ら社會的實踐的とならざるを得ないのである。

即ちこの實踐的社會的生の基礎的なものを生産關係の總體即ち「社會の經濟的構造」に於て見たマルクスは、現代社會を變革せんが爲めに、現代社會の經濟的構造を即ち資本主義經濟社會の構造を變革することを必要と考へ、かくて資本主義社會の構造の究明を以て彼の經濟學の課題とし、<sup>3)</sup>而して此を社會的實在的認識方法によつて把握せんとしたのである。かくて彼はスミスに於

- 1) Marx, Engels Gesamtansgabe. Erste Abteilung. Band. I. Erster Halffand. S. 175. マルクス＝エンゲルス全集第一卷第一一〇頁、
- 2) Marx, Die Thesen, über Feuerbach. Marx-Engels Archiv. Band. I. S. 227. 以下、マルクス＝エンゲルス全集第十五卷第三一三頁以下。
- 3) 前掲拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』

けるとは異なり、商品、貨幣、資本、勞賃、利潤、地代等を以て經濟的なる社會的諸關係の生産物であり従つてこの社會的關係の表現であるとなし、これを通じてその社會的關係自體を把握せんとしたのである。而してこのことは彼の『商品論』に於て最も顯著に見られ得るのである。以下『商品論』に就てこのことを具體的に見よう。

#### 四、『商品論』に於ける精神科學的方法

既に述べしが如く、マルクスは『商品論』に於いて、商品生産社會の生産關係を彼の經濟學の基礎論として究明し、而もその研究にアリストテレス的なる發展的方法を用ゐてゐることは、スミスに於けると同様である。然し既に『商品論』と『分業論』との名の相異が示すが如く、スミスは分業關係としての商品生産社會の生に即してこれを明にして居るに對してマルクスはこの社會的生の生産物としての商品よりこの社會的生を解明せんとしたのである。而して此研究方法は『商品論』がそれより成つて居るところの四つの節の統一ある聯關に於て展開されて居るのである。今以下これらの節の聯關に於てこれを明にしよう。

先づマルクスは第一節の初に於いて『資本論』の本論を有名なる次の語を以て始めて居る。「資本家的生産の仕方 of 支配してゐる諸社會の富は一個の「恐ろしく龐大な諸商品の集大成」として、個々の富はかゝる富の要素形態 *Elementarform* として現はれる。だから吾々の研究は商品の分

析を以て始まる。」マルクスはこゝに先づ資本主義社會の生産物又は表現物に着眼した。而してそれは「龐大な諸商品の集大成」である。而してこの表現物の要素形態としての個々の商品の分析を以て第一節の課題とし、商品生産社會の生産關係把握の出發點としたのである。アリストテレスが「複合的なものは常に全體の單純なる要素又は最小の部分に分解されざる可らず<sup>1)</sup>」となし而してこの要素的なものより發し全體的なものへ歸り行くところの發展的方法を茲にマルクスが適用して居ることはスミスに於けると同様であるが、而もスミスの出發點としたところは心的原理であるに對してマルクスの出發點とせしところは生産物であつて、兩者の研究方法的對立は先づ其出發點に於て顯著に示められてゐるのである。而してマルクスは茲に商品进行分析することによつて『商品の二つの要因即使用價值と價值<sup>2)</sup>』とを明にしたのである。

第一節に於て商品进行分析したるマルクスは第二節に於ては商品を生産するところの「生」であるところの勞働を此勞働の表現である商品の分析を手がかりとして分析した。これ「表現」より「生」に溯つたのである。かくて前節に明にされたる商品の二重性に對し、『商品に含まるゝ勞働の二重性<sup>3)</sup>』を明にしたのである。而して先づ前節に明にしたる使用價值よりそれを「表現」とする有用勞働を明にして居る。即ち「上衣はある特殊な欲望を満足せしめるところの一の使用價值である。それを造りいだすためには、ある規定された種類の生産的活動を必要とする。……かくの如く其生産物の使用價值で、即ち其生産物が使用價值であると云ふ點で、その効用を表示して居る勞働

1) Aristoteles, Politica. 1252<sup>a</sup>.  
2) 此が第一節の表題である。  
3) 此が第二節の表題である。

を、我々は簡單に有用的勞働 *nützliche Arbeit* と云ふ。<sup>1)</sup>次にマルクスは前節に明にせし「價值」より彼の所謂「人間的勞働」を明にして居る。即ち「上衣とリンネルとは、相等しき實體、相等しき本質からなるものであり、相等しき種類の勞働の客觀的な表現、objektiver Ausdruck gleichartiger Arbeitである。」<sup>2)</sup>即ち、「裁縫勞働と織物勞働とは質的に異なる生産的活動であるが、兩者共に人間の頭腦筋肉手等の生産的な支出であり、且つかゝる意味に於て、兩者共に人間的勞働 *menschliche Arbeit* である。」<sup>3)</sup>

曩に精神科學に於ける理解は「表現」の構造より「生」の構造に至り、更に「生」の構造より「表現」の構造に至つて完成すべきものであることを述べたが、以上に於て「表現」より「生」を解明したるマルクスは今や「生」より「表現」が生産せらるゝ方向に於て考察し此節を終つて居る。即ち曰く「あらゆる勞働は、一方では、生産の意味に於ける人間的勞働の支出であり且つ同様な人間的勞働または捨象的勞働と云ふかゝる屬性に於てそれ等は商品價值を形成する。あらゆる勞働は、また他方では、特殊な目的の一定した形態に於ける人間の勞働の支出であり且つ具體的な有用的な勞働と云ふかゝる屬性に於てはそれは使價值を生産する。」

かくて以上二節に於て商品生産社會の要素的「表現」と要素的「生」とが明にされたのであるが、商品生産社會の生産關係の總體を明にせんとするマルクスは、更にこの社會の「表現」の全體的構造を明にし、然る後この「表現」の全體的構造より顧みてこれを表現とする「生」の全體的構造を明にしなければならぬのである。かくて彼は先づ第三節「價值形態或は交換價值」<sup>4)</sup>に於て商品相互間の總體的關係を明にすることにより「表現」の全體的構造を明にして居る。而してこゝにも發展的

1) Marx, Das Kapital (Volksausgabe) S. 9. 邦譯第一二頁以下邦譯頁數は高島氏譯改造社版について示めす。河上宮川兩氏譯『資本論』改造社版には原本の頁附あり。

2) 3) Ibid. S. 11. 邦譯第一四頁(附點筆者)

4) 交換價值はマルクスに於ては「價値の現象形態」Erscheinungsform des Wertesとして把握されて居る。かくて人間的勞働と價値と交換價值との關係は次の

方法を用ひて最も簡單なるものより總體的なるものと四つの價值形態が展開されて居る。

彼は先づ『單一な價值形態』即ち  $\times$  商品  $A = y$  商品  $B$  を分析し、次に此價值形態の發展としての『擴大されたる價值形態』即ち  $2$  商品  $A = U$  商品  $B$ , 或は  $= V$  商品  $C$ , 或は  $= W$  商品  $D$ , 或は  $=$  幾つなる價值形態を分析し、次に此の價值形態の發展としての『一般的價值形態』

$$\begin{array}{l} 1 \text{ 枚の上衣} = \\ 10 \text{ ポンドの茶} = \\ 40 \text{ ポンドの胡椒} = \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} 1 \text{ 枚の上衣} = \\ 10 \text{ ポンドの茶} = \\ 40 \text{ ポンドの胡椒} = \end{array}} \right\} 20 \text{ エルルのリンネル}$$

なる價值形態を分析してゐる。而して此の價值形態に至つて今や總ての商品はリンネルに等しきものと云ふ形態で、たゞに質的に相等しきものとして、即ち價值一般として、現はれるばかりでなく、同時にまた量的に比較され得る價值の大きさとして現はれる。即ち「この一般的價值形態は商品世界の共同的事業としてのみ成立する」<sup>1)</sup>かくて「一般的價值形態は、それ自身の組立てによつて、それが商品世界の社會的表現 der gesellschaftliche Ausdruck der Warenwelt である」ことを示して居る。<sup>2)</sup>

前掲の方程式に於てリンネルによつて果される機能は、時代と場所の異なるによつて種々なる商品種類によりて爲されるのであるが、今此の機能が「終局的に一個特殊な商品種類に限定されるならば、」此の特殊な商品種類は、貨幣商品となり、また貨幣として機能するのである。而して

表現に商  
現純はた  
のはたあ  
労働對象  
間的對象  
人價對  
ちの價  
即つた  
の從商  
單位と  
單ふな  
會云す  
社と出  
一すの  
同有思  
はを  
品性  
「商  
居對  
てみ  
され  
さ  
は  
ら  
現  
語  
邦



茲に「商品社會の價值表現」は完成せられ、「一般的な社會的妥當性」を獲得するに至るのである。即ちこゝに於ては總ての商品は、社會妥當性に於て、貨幣を通じて質的に相等しきものとされると共にまた量的に比較され得るものとなつたのである。これマルクスが最も發展せる價值形態として最後に揚げて居るところの『貨幣形態』である。

商品生産社會の表現の總體としての「龐大なる商品の集成」をかくの如くにして聯關的構造に於て明にせしマルクスは次にこの「表現」の總體的構造よりこれを表現するところの「生」の總體的構造を顧みこれを明にして居るのである。これ第四節『商品の偶像性とその秘密』である。

こゝにマルクスは先づ商品生産社會に於て商品なるものが社會の人間的關係を商品の物的關係として表現する性質を「商品の偶像性」として考察して居る。即ち曰く「要する商品形態の神秘性の本質は、商品形態が人間自身の勞働の社會的性質をば勞働の諸生産物そのものゝ對象的性質として、……それ故にまた總體に對する生産者達の社會的關係をば、彼等の外部に存立しつゝある對象物の社會的關係として人間の眼に反映せしめること、單にこの點に存する」即ち此の場合人間自體の一定の社會的關係に外ならぬものが、人間に向つて諸物の關係と云ふ幻影的形態をとるのである。」

而して此商品の偶像性が表現して居るところの人間的關係自體を考察して、彼は次の如くに述べて居る。即ち曰く「諸々の使用對象物が總じて商品となるのは、それ等が互に獨立に營まれる

會の構造鮮明の前提とす。  
1) Ibid. S. 31. 邦譯第三七頁。  
2) Ibid. S. 32. 邦譯第三七頁。  
3) Ibid. S. 34. 第三九頁。

私的諸勞働 Privatarbeit の生産物であるに外ならぬ。かゝる私的諸勞働の複合體が社會的勞働を形成する。生産者達は彼等の勞働諸生産物の交換によつてはじめて、社會的接觸を結ぶから、彼等の私的勞働の特殊な社會的性質もまた、かゝる交換の内部に於てはじめて現はれる。すなはち私的勞働は交換が勞働諸生産物の間に、そしてそれを媒介として生産者たちの間に、樹立するところの關係によつてはじめて事實上、社會的勞働の肢體として自分を確立する。<sup>1)</sup>即ち商品生産社會に於ては生産勞働は「獨立に營まれる私的諸勞働」であつて、このそれ自身に於て孤立的な諸勞働は、その各勞働の生産物たる諸商品の交換關係によつて初めて互に結ばれるのである。而して此諸商品は前節の『貨幣形態』に於て明にされたるが如く貨幣を媒介として全社會的に結ばれて居るのである。かくて諸の私的勞働は其生産物たる商品並に貨幣を媒介として、初めて間接に全社會的に結ばれて居るのである。これ即ち商品生産社會の本質である。

而して「商品の偶像性」なるものも、此商品生産社會の本質より生ずるのである。即ち彼は上述の語に續けて曰く、「それ故に生産者たちにとつては彼等の私的諸勞働の社會的關係は、それがあるところのものとして、即ち彼等の勞働自體に於ける人と人との直接に社會的な關係としてではなく、むしろ人と人との物的な關係ならびに物と物との社會的な關係として現はれる。」

既に述べたるが如く「理解」は「表現」より「生」に至り、而して最後に再び「生」より「表現」に至つて完成するのであるが、以上の如く商品生産社會の「表現」たる商品の構造よりこれを生産すると

1) Ibid. S. 37. 第四三頁

この商品生産社會の「生」の構造を明にしたるマルクスは、第二節の終りに於けるが如く、今や此「生」の立場より「表現」の方向へ顧みて居る。而して第一節以來規定し來れる資本主義社會の諸範疇即ち勞働並に商品の二重性、價值性、價值の大きさ等を顧み、これをば一層明確ならしめ居る。例へば商品の二重性については次の如くに述べて居る。即ち勞働生産物の有用物と價值物とへの分裂は「交換が既に充分な擴がりと重要さを獲得しかくて有用物が交換のために生産されることにより従つて物の價值性が其生産そのものに際し最初から考慮に入るやうになるや否や初めて實際的に確立する」と述べて居る。かくマルクスが「生」より生産物へと説明する仕方は一見スミスが「生」より其生産物たる富、貨幣、資本等の成立を説明する仕方と相似て見えるのであるが、而も單に「生」より此等生産物の成立を説くに止まるスミスの方法と、先づ我々に直接に把握し得らるべき生産物の構造を明にし直接に把握し得ざる「生」の構造をこれより明にし然る後更に此「生」の構造より翻つて生産物の構造を明確にするマルクスの方法との間には、精神科學的方法の著しき進歩があるのである。

## 五、結論。資本主義社會の本質の鮮明に對する其意義

以上明にしたところの精神科學的方法によつて、資本主義社會の最も根本的な性質たる商品生産社會としての本質は、マルクスに於て初めて明確に把握されたのである。従つて我々が現代

資本主義社會の根本的缺陷として承認せざるを得ないところの現代社會に於ける「人間の生活の物化」と「經濟生活の無政府狀態」との根本原因に對する説明もマルクスに於ては以上明にされたる商品生産社會の本質の中に與へられて居るのである。即ちそれは要するに商品生産社會に於ては「獨立な私的諸勞動」が各自の生産物を通じて只だ間接に、物的に結ばつて居ると云ふことの中に與へられてゐるのである。

先づ現代に於ける「人間の生活の物化」と云ふことについて云へば、商品生産社會に於ては、人間相互の關係は物を通じて初めて結ばれて居るが故に、人間の關係は物的關係として現はされる。これがマルクスの高調せしところの「商品の偶像性」である。然るにマルクスに於ては、經濟關係が一切の文化の「眞實の基礎」となつてこれを規定するのであるから、資本主義社會に於ては總ての人間關係が物化せられ、かくて總ての文化が物化せられることとなる譯である。

次に現代社會に於ける「經濟生活の無政府狀態」と云ふについて云へば、商品生産社會に於ては總ての生産勞動は獨立的に營まれる私的諸勞動であつて、それは只だ各自の生産物を通じて間接に物的に結ばれて、初めて社會的關係を保つて居るに過ぎないのである。かくて各自の生産と社會の需要との一致は本質上偶然的なものとならざるを得ないのである。かくて經濟生活の無政府狀態の根源が商品生産社會の中に含蓄されて居るのである。

マルクスは『商品論』に於て資本主義社會の商品生産社會としての本質をそれ自身として明にせ

しのみならず、更に之を他種の經濟社會即ち原始共產體、中世社會、將來的共產社會と對比せしめて居る。このことによつて商品生産社會の本質が更に一層明にせられると共に、また人間關係の物化及び經濟的生活の無政府狀態が資本主義社會に特有のものであることが示されて居る。マルクスはこゝに此等の社會を歴史的發展的順序に於いて並べて居ないのであるが、私は『ドイツ・エイデオロギイ』に於けるが如き歴史的順序に於て述べることをする。

彼は原始共產體に於ける「共同的な、即ち直接に unmittelbar 社會化された勞働」を族長家族に於いて見て居る。こゝに於ては「諸種なる物は家族に對して當該家族の勞働の相異なれる生産物として對立するが、しかもそれら自らが相互に商品として對立するのではない。」<sup>1)</sup>何となれば、これら相異なる生産物を作る相異なる個人的勞働力は「最初から家族の共同的なる一勞働の諸器官としてのみ作用するのだからである。」<sup>2)</sup>

この原始共產的なる社會より進んで中世的な社會となるのであるが、この社會について彼は次の如く述べて居る。即ち中世的社會に於ては物質的生産の社會的關係は、人的な依存によつて特徴づけられて居る。而して此社會に於ては彼等が勞働を行ふ場合の人と人との社會的關係は、人間自身の人間的關係として現はれ、資本主義社會に於けるが如く、諸物の勞働諸生産物の社會的諸關係で假裝されることはない。従つてこの生産關係の上に築かれた生活の諸領域も同様に人的依存の關係によつて特徴づけられて居る。<sup>3)</sup>

1) Ibid. S. 41. 邦譯第四七一八頁。

2) Ibid. S. 42. 邦譯第四八頁。

3) Ibid. S. 40-I. 第四七頁。

マルクスに於ては、この中世社會が商品生産社會の最高發展段階としての資本主義社會に進むにつれて、直接なる人的關係は破壊せられることとなり、而して商品及び貨幣を媒介として始めて孤立的なる私的諸勞働が間接に社會的關係に結ばれて居る状態になるのである。かくてここに於て初めて「商品の偶像性」が現はれ、人間生活が物化せられ、また經濟生活の無政府狀態が其礎付けられることとなるのである。

マルクスは資本主義社會が更に發展して共產社會に進むと考へるのであるが、マルクスがここに「共有の生産手段をもつて勞働するところの、そしてその多くの個人的諸勞働力を意識的に一の社會的勞働力として支出するところの自由人の團體」<sup>1)</sup> der Verein freier Menschen, die gemeinsamen Produktionsmittel arbeiten und ihre vielen Arbeitskräfte selbstbewusst als eine gesellschaftliche Arbeitskraft verausgaben と云へるは即ちこれである。即ち茲に於ける社會的勞働は原始共產體に於けるが如き「直接 unmittelbar に社會化された勞働」ではなく、この直接的な社會的勞働が商品社會を通じて一度分化し、孤立的な私的勞働 Privatarbeit となりしものが更に意識的に統一されたところの自覺的な共同勞働 Gemeinarbeit であると考へられて居るのである。この共同勞働の「社會的に計畫的な分配は、種々なる勞働機能と種々なる欲望との間に、正しき比率を保たしめる。」かくて生産されたる共同生産物 Gemeinprodukt の一部分は再び生産手段として役立ち、社會的なものとして止まり、他の部分は團體員の生活資料として消費される。これがマル

1) Ibid. S. 42 第四八頁

クスに於て、「自由の王國」の基礎となるところの合理化された經濟的構造であつて、この經濟的基礎の上に於いてのみ「それ自身目的とされるところの人間的能力の發展」が即ち「眞の自由の國」の花が咲くのである。かくてこゝに於て初めて人間は「自由人格」となり得るのである。

かくてマルクスに於ても、スミスに於けるが如く、商品生産社會の生産關係は社會的分業關係なのであるが、而もマルクスの秀れたる認識方法は此社會的分業關係につき、直接に人的に結ばれたものと間接に物的に結ばれたるものととの區別を明確にし、原始共産制、將來共産制に於けるものは前者であり、これに對して資本主義社會に於けるものは後者であることを明にしたのである。而して此物的なる社會的分業關係が、經濟生活の其無政府狀態及び人間生活の物化の基礎とされたのである。

以上に於て私は、マルクスに於ける精神科學的方法を『資本論』の最も難解な且つ基礎的な部分である『商品論』について明にし、併せて此研究方法によつる認識の結果の意義を考察したのである。而もマルクスに於ける精神科學的方法の適用は單にこの部分に限られないのである。

要するに、眞に實踐的な立場に立つことを得たマルクスは、歴史的社會的實在の本質を最も具體的に即ち其實踐性に於て把握することを得、この實踐的本質に即せる實踐的な認識方法に於て此實在を科學的に究明し得たのである。既にマルクスの實踐的立場を考察した私は、<sup>2)</sup>今此稿に於て彼の實踐的認識論の一端を明にしたのである。<sup>3)</sup>マルクスの實踐的な人間觀及歴史的社會的實在觀については、これを稿を改めて明にすることとする。

1) Das Kapital· Band. III. 2. (Von Engels) S. 335. 邦譯『資本論』第三卷下第三五八一—九頁。

2) 拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』は此を主眼とせり。

3) マルクス實踐的動的認識論は以上明にせし精神科學的方法にて盡さるものではない。彼の發展的研究方法等尙考察さるべき重要な問題がある。